

【書評 1】

東大社研・玄田 有史 編

『希望学あしたの向こうに：希望の福井、福井の希望』

(東京大学出版会、2013 年)

西 出 順 郎

評者は生粋の福井人である。多少の出入りはあったが、長きにわたって福井の地で育ち、学び、働いた。そのせいか、福井に対する想いはいささか複雑で、考えるといつも故郷への「愛着」とともに漠然とした「不安」「怒り」が込み上げてきた。それは福井を愛するがゆえに福井への理想が高すぎたからである。とはいえ、福井を離れ、他県暮らしになってからというもの、理想としていた想いはかなり曖昧になってきた。酒を酌み交わし、「福井はあだ、こうだ」と蘊蓄を傾ける自分の姿は浮かぶ。しかし、今や思い出せるのは、不安や怒りを「持っていたなあ…。」という感覚だけ。当時の熱かった想いは一体何だったのだろうか。

ゆえに本書に出会ったとき、評者は何か引き込まれるような、強い関心を抱かずにはいられなかった。本書は問いかける。「福井に、これからはたして希望はあるのか。福井の取組みが日本社会にどのような希望を示すことができるのか。」と。本書は、はたしてかつての自分を思い出させてくれるのか、福井の理想や希望を

説いてくれるのか。評者の気持ちはとても高ぶった。

本書は「福井の希望」をメインテーマとしたエッセイ集である。第一線で活躍する 27 人の研究者が執筆を担当している。その多くは地元の新聞紙上で掲載されており、地元福井の皆さんの御目に適った、福井が凝縮された作品集といえよう。

それぞれの筆者は、数年にわたって福井を調査し、その結果にもとづき福井の豊富な事実を提供してくれる。個々のテーマも多岐にわたる。なかには原発や嶺北・嶺南といった地域独自の問題など、地元では面と向かって議論しにくい、しかし避けるわけにはいかない課題にも向き合ってくれる。福井人にとっては実に刺激的だ。

中身をみてみよう。本書では、「政治と経済」「生活と家族」「歴史と文化」という三つの視点の中から各筆者が自らのテーマを掲げ、福井の希望に接近する。

一つめの「政治と経済」では、福井の地場産業や政治・行政が未来に向かって

変革する姿が描かれる。繊維や眼鏡といった福井の製造業を支える人達の力強さ、「越前がに」を全国ブランドへと成長させた人達の連帯感、「営業」を行政現場で具現化させる福井県庁の斬新性、さらには原発問題で福井県政が発揮するイニシアチブ。いずれのエッセイも清清しく、絶えざる変革やリスクを恐れぬ勇気の尊さを我々に教えてくれる。

二つめの「生活と家族」では、福井の女性や若者、地元へのUターン問題などに焦点をあてる。各筆者が独自のアンケート調査を駆使し福井の生活実態へと切り込んでいく。県外での仕事や子育てに不満を感じてUターンした福井人。彼らの満足感が高いのは、まさしく福井の住み易さを示す証左であろう。特に評者にとっては、生活困窮・孤立の問題や県外在住者の「福井感」を数字でみるのは新鮮であった。また、日々の皮膚感覚も決して侮れないと強く感じた。福井は女性が仕事を見つけやすく、共働き率が高い。しかし、必ずしも女性に開かれた地域というわけではない。本書は、それら要因を数値にとらわれず、表に出にくい地元の実情としても披瀝する。福井の女性が読めば溜飲を下げるだろう。ならば、福井の生活実態は他県と比べてどうなのか。福井ライフのより細かな実態を相対的に確認するためにも、評者としては、他県にかかる同様の調査結果を是非ともみたい。

最後の「歴史と文化」においても、挑

戦する福井人の姿のみならず、福井の今昔を垣間見ることができる。越前と若狭の特徴、例えば、越前の「しのぶ文化」と若狭の「積み重なる文化」の違いなどは、様々な角度から両者の歴史的、文化的特徴を教えてくれた。福井の「恐竜学」がアジアへと羽ばたく姿は、地方自治体が独自に育てる学問の意義を明らかにしてくれた。三国、敦賀、そして小浜港の近代史は、北前船が福井発展の原動力であり各港を中心に福井の近現代が形成されたことを、さらには、水海の田楽能舞の伝承や農環境とともに歩む地域おこしの姿は、福井人に宿る過去への尊敬と未来への心意気を伝えてくれた。

本書は、未来への変革であれ文化・伝統の継承であれ、地域の使命を担って行動する意義をメッセージとして力強く発信する。ある筆者がいう「リアルな希望は一番に悩み、真剣に考えてきた者のみが見出せる。」「希望の広がりとは、それを見つけ出し、みんなの力を一つにして変えていく。」ことの大切さを、どのエッセイからも実感できるのである。

ところで20年以上前になる。評者は、元通産官僚で評論家の故天谷直弘さんと食事を供にする機会に恵まれた。天谷先生は、1970-80年代に日米自動車交渉等で手腕を発揮し、『日米「愛憎」関係 今後の選択』（1983年第4回石橋湛山賞受賞）などの著作で知られた郷土が誇る大先輩である。当時は電通総研の所長を努めて

いらっちゃった。

評者は若かった。勢いに任せて福井の現状を痛烈に批判し、先生に意見を乞うた。そこで朴訥な語りで先生が論したのは「教育」の重要性である。橋本佐内や由利公正という、幕末日本を牽引した福井の先達に触れ、福井のアイデンティティは、優れた人材の輩出、社会への人的貢献にあるとおっしゃった。社会全体に対して人的貢献ができるなら、自らの地域の変革を担う人材も自ずと輩出される。本書のおかげで先生の言葉の重みを改めて噛み締めることができた。

その一方で、本書に対し、残念に感じる点が決してなかったわけではない。ある筆者は「希望があると答える人が多ければ、そこにはきっと何かがある。」「希望を無理矢理一つにしようとするといろいろとややこしいことになる。」という。確かに「何か」があるとは思ひ、その何かは、決して「一つ」ではないであろう。しかし、自らが住む地域や故郷への想いは、ただ単に住んでいる、生まれた場所であるという事実には依拠するわけではない。甲子園で地元代表を応援し、在京・在阪の県人会に参加する人々は、それらの地に皆と共有するイメージを持っているからであろう。そうなると、そのイメージの未来はその地の希望として、誰もが抱いていたのではなからうか。地域の皆が共有する希望とは「何か」。その可視化の試み無しに地域の希望を語るこ

には、一抹の寂しさ、虚しさがある。「生まれ育った場所であること以上の『意味』を見つけない。」というある福井人の言葉は、自らが住む福井のアイデンティティや希望を福井の皆と共有したいという「心の裏返し」にも聞こえる。

前置きが長くなったが「福井の希望、福井が日本社会に示せる希望は何か。」、この本書自らの問いかけに対し、本書は十二分に応えてくれているであろうか。評者は、この一点においてはどうしても欲張ってしまい、「何か」の具体像を本書に期待してしまうのである。如何に内容濃く読み応えがあっても、福井の希望の話が歯切れよくても、抽象的で最後にさっぱりと触れるエッセイもある。正直、肩すかしの感は否めない。

エッセイとはいえ、研究者が軽々に論じるわけにもいかないのは重々承知している。しかし評者としては、福井人が「希望」と思える具体のイメージやアイディアを予測、提言する、もしくはその方向へと煽動する冒険にも挑んでもらいたかった。「教育立県」でもいい、その発現可能性はともかく、希望の具体像の輪郭が認識できれば、そこから具体的な議論やアクションが誘発されると思うからである。

もちろん、この偏りある私見によって本書の価値が左右されることなど全くない。本書が、福井人に限らず、地域社会に関心を抱く人々を大いに満足させてく

れる、かなりの労作であることは疑いのないことである。是非とも、それらの人々には一読してもらいたいし、福井のことをより深く知ってもらいたいと思う。

「日本一幸せなランキングに『浮かれな
い』ところこそが本当の福井の魅力」と

いわれるだけで、日々自らの不遜さを恥
じていながらも、評者は素直に喜んでし
まう。筆者の方々には、これまで同様に
福井の調査研究を深めて頂ければ、また
我々福井人に対し、福井のこれからを是々
非々で論じて頂ければ幸甚である。